

平成30年度 学校評価表

品川区立伊藤学園

校長 羽鳥紀子

伊藤学園校区教育協働委員会

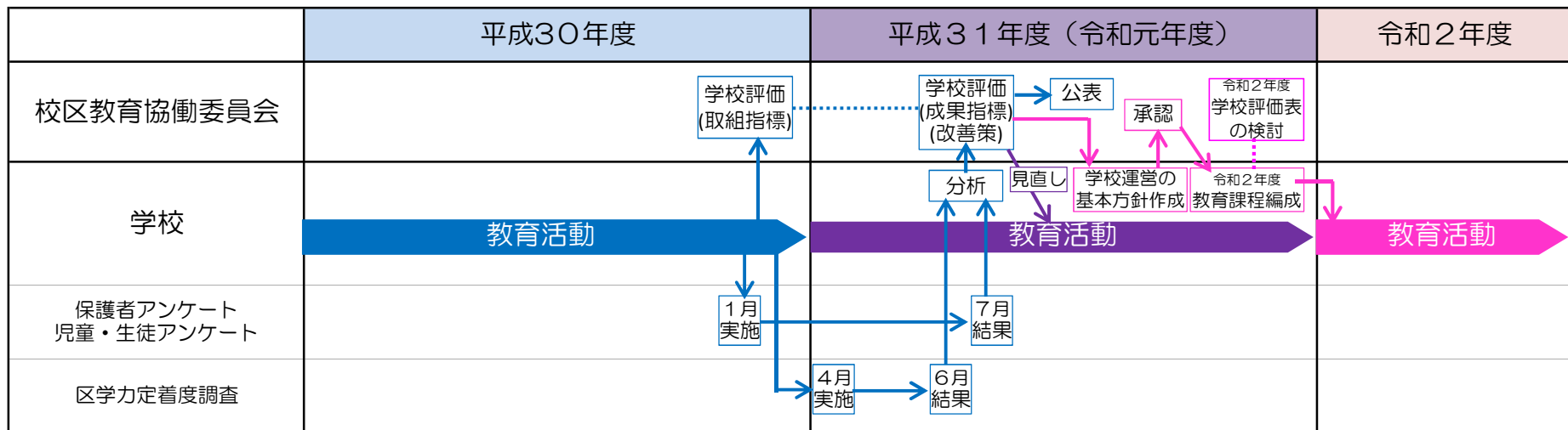
委員長 吉岡昌紀

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱に基づき、次に掲げる事項について学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※平成31年度の学校評価が令和2年度および令和3年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



平成30年度 学校評価 品川区立伊藤学園
 評価項目1 学力に関すること

重点目標		<p>○小中一貫教育要領で示されている基礎的・基本的な知識・技能の習得に力を入れるとともに、児童・生徒の協働、対話を積極的に取り入れ、「切磋琢磨(学び合い、高め合い)」を大切に授業を展開し、学力向上を図る。 ・加配教員、講師、指導助手を活用した少人数指導、チームティーチングによる指導。5年生以上の教科担任制による教員の専門性を生かした指導を通して、一人一人の特性、発達段階に応じたきめ細やかな指導を行う。 ・放課後、長期休業中の個別指導による学習の基礎・基本の徹底から、発展的な学習目標としての英語検定をはじめとする各種検定受験へのサポートまで、児童・生徒の実態に応じた指導を実施する。 ・市民科と各教科を関連させ、「学習のきまり」を基に学習規律の徹底を図る。 ・校内研修等を活用し、教員の授業力を高める。</p>		
指 評 標 価	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評 価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	・区学力定着度調査(全学年)で区の平均正答率を上回る。	・区学力定着度調査は、おおむねどの学年・教科も区を上回った。一部下回った教科については、「活用」問題の正答率が低かったことが要因となっている。	B	○区学力調査結果に基づく課題と改善策 <国語>課題は文章を書く力である。改善策として、国語を中心に、他教科でも、自分の意見や考えを記述させる活動を増やす。その際、条件に即して書く、構成に気を付けて書く等について重点的に指導する。また、前期課程では引き続き日記の宿題を課し、日常的に文章を書くことに慣れさせる。 <社会>課題は資料から必要な情報を読み取る力である。改善策として、「資料を見て分かること(事実)」と「資料から言えること(考察)」を整理して、読み取る活動をこれまで以上に多く取り入れる。授業で資料集の使用頻度を上げ、慣れさせる。 <算数・数学>課題は、活用問題への対応である。改善策として、発展的な課題に取り組む機会を増やしていく。
	・全国学力調査(6,9年)で、都の平均正答率を上回る。	・全教科で都の平均正答率を上回った。 ・昨年度に比べて正答率が向上した。	A	
	各種学力調査結果を分析し、課題の解決に向けた指導に取り組む。 補充学習(サマースクール、放課後学習等)の実施、家庭学習の工夫等により、児童・生徒の実態に応じた指導の充実を図る。	・文章表現力の向上を図るため、構成表、推敲時確認表等を作成し、指導した。考える力の向上を図るため、資料や話し合いから、自分の考えをまとめる活動を多く取り入れた。 ・サマースクールを全学年で5日間実施した。復習や補充・発展的な内容について個別指導を行った。 ・前期課程の児童を対象として、放課後に学習教室を年間49日90時間実施した。後期課程では英検対策を実施した。 ・指導形態や内容について、さらに充実・改善を図っていく。	B A	
②	保護者による授業評価(質問紙調査)において、肯定的評価を90%以上にする。	・肯定的評価91%	A	<理科>課題は自分の考えを筋道立てて書く力である。実験、観察から分かった客観的事実に対して、その原理、理由を考えて書く機会を増やし、繰り返し指導していく。 <英語>語形・語法の知識・理解が課題である。スペリングコンテストを実施するなど語彙力の定着を図る機会を定期的に取り入れ、年間を通じて繰り返し指導する。
	校内研究・研修を通して、教員の指導力向上を図る。	・全教員が年間数回の授業研修を行い、指導法、個別の支援法等について指導力向上に取り組んだ。 ・日常的に相互に授業を見合い、指導力向上に努めている。 ・課題は、研究のねらいを明確にして、成果を次に生かし積み上げていけるような仕組みづくりである。	A	
	市民科と各教科を関連させ、全校で統一した「学習のきまり」を基に学習規律の徹底を図る。	・全校統一の「学習のきまり」に基づき、発達段階に応じて、さらにきめ細かく学年・学団ごとのきまりを設定して、教員間で共通理解を図って指導にあたった。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

平成30年度 学校評価 品川区立伊藤学園
 評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		<p>○市民科を中心として、全教育活動を通して、児童・生徒一人一人が自らの在り方や生き方を自覚して、困難に負けることなく社会の中でよりよく生きていくための確かな実践力と、社会貢献できる資質・能力を養う。</p> <p>・9年間を見通した市民科年間指導計画に基づき、児童・生徒の実態を踏まえた重点単元を設定し、市民科学習を推進する。 (いじめ防止、コミュニケーション能力の育成、あいさつ、礼儀、キャリア教育など)</p> <p>・義務教育学校の良さを生かした、1から9年生までの全校一致の生活指導体制を確立する。</p> <p>・スクールカウンセラーや巡回相談員、関係諸機関と連携して、いじめ防止や不登校、特別な支援を必要とする児童・生徒などに組織的に対応する。</p> <p>・学校行事、生徒会活動、部活動や、合同移動教室を含めた異学年交流行事に積極的に取り組ませて、社会性、自己有用感の向上を図る。</p> <p>・基本的な生活習慣や規範意識の定着のばらつき克服のため、児童・生徒への個別指導と家庭への啓発を強める。</p>			
指 評 標 価	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明		評 価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明			
①	<p>保護者アンケートの「学校は適切な生活指導(礼儀、挨拶、言葉遣い、服装、きまりなど)を行っていますか」という質問項目で肯定的評価を90%以上にする。</p>	<p>・肯定的評価94%であった。</p> <p>・生活のきまりに関する指導については、徹底できている。</p>		A	<p>○生活のきまりに関する指導については、徹底できている。今後も引き続き、全教職員が共通のルールに基づき、一体となって生活指導にあたっていく。</p>
	<p>全校で統一した「生活のきまり」に基づき、すべての児童・生徒が、あいさつや礼儀、場に応じた行動をできるよう教員が共通理解して指導すると共に、家庭への啓発を図る。</p>	<p>・「生活のきまり」を基本に、教員間で確認し合いながら、学年共通で一貫した指導を行ってきた。</p> <p>・保護者への連絡を密に行ってきた。</p> <p>・課題はあいさつ。誰に対しても自らすすんでできるように育てていく。</p>		B	<p>○明確な規定のない新たな問題等への対応については、生活安全部を中心に話し合い、方針を決定し組織的な対応で指導をすすめていく。</p>
②	<p>区学力調査の児童・生徒質問紙調査(icheck)における社会性に関する項目の肯定的回答が、前年度の数値や全国平均を上回る。</p>	<p>・ほぼ全ての項目で全国平均を上回った。</p> <p>・「近所の方へのあいさつ」が課題である。</p>		B	<p>○地域の方に対して自らあいさつすることが課題である。改善策として、地域の方を学校にお迎えする機会を捉え、自分から先にあいさつすることについての指導を継続的に繰り返し行っていく。</p>
	<p>市民科学習の意図的・計画的な実施および保護者との連携を通して、児童・生徒の社会性の向上を図る。</p>	<p>・市民科の授業や行事指導を通して子ども同士の仲を深められる指導をしている。また、その様子を学年・学級通信を通して保護者へ伝えるようにしている。</p> <p>・連絡帳を活用して、各家庭との連携を心がけ、指導の経過の共通理解を図ってきた。</p>		A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

平成30年度 学校評価 品川区立伊藤学園
 評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		<p>○「運動をするための体力」「健康に生活するための体力」の双方を向上させ、次世代を担う子供たちをはぐくむ。(アクティブプランto2020の推進)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京都統一体力テストを分析し、活用する。 ・体育授業の改善・充実を図ると共に、品川スポーツトライアル、ワンミニッツエクササイズを推進する。 ・体力向上の原則である基本的な生活習慣の定着に向け、健康教育を充実するとともに、体育授業や学校行事を通じて、運動そのものの楽しさを味わわせ、継続的に運動に取り組ませる。(前期課程) ・一校一取組、一学級一実践運動に確実に取り組む。外遊びを励行する。(前期課程) ・生涯にわたり運動する習慣が身に付くよう、保健体育の授業において基礎的な知識及び技能を習得させる。(後期課程) ・体力向上努力月間やオリンピック・パラリンピック教育を推進する。 		
指 評 標 価	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評 価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	「体力・運動能力調査」の全項目で、都の平均値を上回る。	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年に比べて都平均を上回った種目が増えた。 ・男女ともほぼ全学年で都平均を上回ったのは8種目中4種目(走力、投力、筋力(腹筋)、敏捷性) ・女子の持久力もほぼ全学年で都平均を上回った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○ほぼ全学年共通の課題となっているのは、柔軟性である。 ○解決策として、体育・保健体育の授業、家庭学習で、年間を通じて継続的に柔軟運動に取り組む。
	体力調査の課題分析に基づく、体育指導計画の改善。テクニカルアドバイザーとのTTによる個に応じた指導の充実。ワンミニッツエクササイズ®の家庭学習化による体力づくりの日常化等によって、体力・運動能力の向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・テクニカルアドバイザーとの連携により、運動が苦手な児童に手厚く指導にあたることができた。 ・品川スポーツトライアルへの取組を通して、課題である投力、跳躍力の向上を図った。 ・課題は日常的な運動機会が少ない児童・生徒への指導、意欲付けである。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○柔軟性は運動能力の向上や怪我の防止を図る上でとても重要である。これまで以上に、体育における各種目の運動特性に応じた柔軟運動に確実に取り組ませていく。
②	「運動習慣調査」の運動への意欲に関する調査項目で、肯定的回答を90%以上にする。	<ul style="list-style-type: none"> ・肯定的評価は、前期課程平均94%・後期課程平均84%で、目標値を上回った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○運動への意欲は高い。この状態を維持できるように体育科を中心に運動を愛好する心を育成していく。
	オリパラ教育の一環として、公式種目を専門講師の指導のもとで体験させる、品川スポーツトライアルを活用して日常的に目標をもって運動に取り組ませる等、多様な運動機会を設定する。	<ul style="list-style-type: none"> ・オリパラ教育の一環として、1～4年では車いすラグビー、7年では車いすバスケットボール、9年ではバスケットボールの講演と体験教室を実施し、スポーツへの関心を高めるとともに、フェアプレーの精神を育むことができた。また、障害者や多様性についての理解も深めさせることができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○今後もプロのアスリートによるスポーツ教室を取り入れ、運動の楽しさ、素晴らしさを感得させていきたい。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

平成30年度 学校評価 品川区立伊藤学園
 評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		<p>○いじめは絶対に許さないという基本姿勢を児童・生徒・保護者に示し、いじめのない児童・生徒の自主性に富んだ教育活動を展開する。 <チーム学校(学校・保護者・地域・関係諸機関一体となった教育活動)としての取組> ・市民科学習等を通して保護者と連携し、児童・生徒の人間関係形成能力の伸長、規範意識、人権尊重意識の醸成を図る。 ・スクールカウンセラー、関係諸機関と連携して、いじめ防止や不登校、特別な支援を必要とする児童・生徒などに組織的に対応する。 ・地域健全育成運営協議会を年3回実施し、保護者や地域と連携して、いじめ根絶の風土作りを行う。 <市民科モデル実践校としての取組> ・全学年、毎月末に市民科学習「いじめ防止プロジェクトin伊藤学園」を実施する。 ・4,7年でいじめ防止プログラムを指導。7・8年生有志を対象に、スクールバディ養成研修を実施。スクールバディ活動(生徒主体のいじめ防止運動)の実施。 ・4～7年でhyperQU(学級集団アセスメント)を実施し、児童・生徒理解を深め、望ましい学級・学年集団作りを進める。</p>			
指 評 標 価	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評 価	今後の課題と改善策	
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明			
①	保護者アンケートにおける『お子さんのことで、教員は親身になって指導したり相談にのってくれている。』で、肯定評価を90%以上にする。	・肯定的評価93%	A	○引き続き、多くの大人(教師、カウンセラー、サポートスタッフ、指導ボランティア等)で見守り、情報共有を密に行っていく。 ○カウンセラーによる相談体制の更なる充実のため、カウンセラー室の開放時間を新たに設ける。 ○問題発生時の対応について、報連相の徹底を図り、組織的に対応策を決定することで、保護者、関係諸機関との連携をこれまで以上に確実に行う。	
	児童・生徒の問題行動や悩み等に早期に対応できるよう、担任を中心に、全教職員で協力して一人一人をよく観察し、変化を捉え、情報共有を密に行う。	・学年・学団で定期的な情報共有の時間を持ち、生活指導上の問題の早期発見、早期対応に努めた。 ・気になる子どもの情報はその都度学年で共有し、複数教員による見守り体制を整えるなどの対応をしてきた。	A		
	問題等発生時には、学校、保護者、地域、関係諸機関の情報交換を密にし、連携して指導にあたる。	・生活安全部を中心に指導方針を決め、全教員の共通理解のもと、組織的に指導にあたってきた。 ・保護者との連絡を密にし、指導への理解を得るよう努めた。	B		
②	生活状況調査(いじめ防止のためのアンケート)で、友人から悪口、暴力、仲間外れ等を受けたと回答した児童生徒の割合を20%以下にする。	・年3回実施した調査の結果、1学期は2つの学年、2学期は1つの学年で20%を超えていたが、3学期には、改善され全学年20%以下となった。 ・20%を超えた項目は「悪口を言われることがある」である。	A	○悪口については、日常的な生活場面および市民科を中心とした教科学習の場面において、丁寧な言葉遣いや、相手の気持ちを考えた伝え方等について繰り返し指導していく。 ○引き続き、生活状況に関する質問紙調査、担任と児童生徒一人一人との個別面談を毎学期、定期的に行っていく。そして、質問紙調査、面談で得た情報についての報連相、校内委員会での対策検討を徹底し、確実な初期対応を行っていく。	
	市民科学習や学校行事等を通して、規範意識、人権尊重意識の向上を図り、思いやりのある集団作りに努める。	・生活上の問題について子ども自ら考える機会を市民科を中心に日常的に設けて規範意識、人権尊重意識の向上に努めた。 ・行事等においては、児童の主体性が発揮できるように実行委員を募り、児童・生徒主体で展開できる工夫を行った。	A		
	人間関係のトラブルを早期発見し、早期対応することで、いじめの未然防止を徹底する。	・記名、無記名の2種類の生活状況アンケート、毎学期の個別面談を実施した。さらに、気になる児童・生徒には教師から積極的に声を掛ける等、問題の早期発見・対応の徹底に努めた。	A		

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		○義務教育学校だからこそできる市民科学習の創意工夫、異学年交流活動の充実を図る。 ・学校行事と異学年交流活動等について、マネジメントサイクルを活用した見直しと充実を図り、児童、生徒、教職員、保護者、地域の方が充実感を味わえるものにする。 ・連携校とは、6年の合同市民科、伊藤学園における6年の体験授業など、連携活動の創意工夫を進める。 ※異学年交流活動＝交流授業、縦割り班活動、交流給食、合同移動教室、9年生による1年生のお世話など		
指 評 標 価	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評 価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	保護者アンケートの『お子さんは、学校生活を楽しんでますか』で肯定的評価を90%以上にする。	・肯定的評価94%	A	○引き続き、市民科学習を中心に、コミュニケーション能力等の向上を図っていく。 ○9学年が共同生活しているという義務教育学校の良さを生かし、異学年交流のさらなる充実を図っていく。 ○コミュニティスクールとしての教育活動のより一層の充実を図るため、今後は、地域の方と交流する学習機会を増やす。
	集団の中で楽しく充実した生活を送るために必要なコミュニケーション能力等を伸ばすため、市民科学習、行事等の充実を図る。	・心の成長に寄与するような経験ができるよう他学年の児童生徒との交流を計画的に実施してきた。特に、下級生とのかかわりにおいて、指導的立場を経験させ、自己有用感の醸成を図るよう工夫した。 ・行事の運営を通して、一人でも多くの児童・生徒が活躍し、達成感を得られるように内容を工夫すると共に、運営においても実行委員を中心に据え、教員は支援に努めた。	A	
	人とかかわりを通して、自己肯定感、自己有用感を向上させるため、異学年交流活動の充実を図る。	・他学年との交流に取り組みながら、児童・生徒間の関係づくりだけでなく、他学年の教員間との関係づくりも意識した。 ・連携校交流、保幼小交流、地域(町会)交流等、学校外の人とかかわる機会を積極的に設け、コミュニケーション能力の向上を図った。 ・今後は、コミュニティスクールとしての強みを生かして、地域の方と交流する活動の充実を図っていきたい。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成